

第5回ハットン シンポジウム： (3)日本招致から大会終了まで

中島 隆¹⁾・石原 舜三²⁾

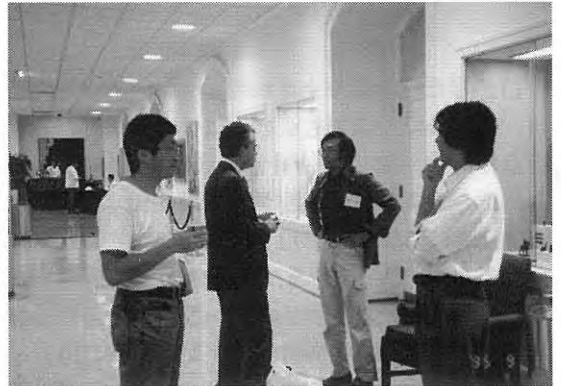
1. はじめに

2003年はIUGG, ゴールドシュミット・コンファレンスと大型・超大型の国際学会が開かれたが, それらに混じって4年に一度開かれる花崗岩研究の国際シンポジウム, ハットン シンポジウムの第5回大会が, 9月2日~6日 豊橋市の愛知大学で開かれた. その開催決定から大会本番までを, 舞台裏から追ってみた.

2001年のエクロジャイト・コンファレンス, 2002年のレルゾライト・コンファレンス, ロディニア・ゴンドワナIGCPシンポジウムと, 近年日本で行なわれる中小規模の国際シンポジウムが目立ってふえてきている中で, 今後日本で開かれる国際シンポジウムの参考になればさいわいである.

2. 話は10年前にさかのぼる

ハットン シンポジウム日本開催の話が初めて出たのは, 今から10年前の1993年であった. 地元メリーランドで開かれる第3回大会を2年後に控えて組織委員長の立場にあった, メリーランド大学のマイケル・ブラウン教授が, 地質調査所の招聘で来日した際に, 第5回大会を日本で開催するよう立候補してはどうかと言ってきた. ハットン シンポジウムは, 次の大会の開催国の代表者が4年間組織委員長をつとめるきまりになっており, その次の大会の開催地を決めるのも仕事の一つである. 第4回大会はフランス開催がほぼ決まっており, 彼はその次の大会のための打診をしてきたのである. ハットン シンポジウムは毎回違った大陸で開催し, その花崗岩を観察するというのが基本方針となっている. こ



第1図 メリーランド大会中に, 会場となったThe Inn and Conference Centerのロビーでマイケル・ブラウン教授から日本立候補の可能性を打診される日本人参加者(左から志村, ブラウン, 中島, 川野).

れまでヨーロッパとオーストラリアでやっており, 今回は北アメリカのメリーランドなので, 次はアジアが有力だ. アジアでやるとすると, 研究のレベルや国内インフラの条件等を考えて日本が一番適当だと思う, というのがブラウン氏の主張であった.

日本側はそれに対し, その時点では曖昧な返事しかできなかった. 日本国内の花崗岩研究者諸氏がどう言われるかわからなかったし, 何しろ10年後のことである. そのころの国内の花崗岩研究がどういう状況になっているかも予想がつかないし, 私たちが10年後に花崗岩を研究しているかどうかだわかってわからないのに, という思いもあったからである.

それから2年後の1995年, メリーランドで開かれた第3回ハットン シンポジウムの期間中に, 組織委員長のブラウン氏から再度, 第5回大会を招致立候補しないかと誘いがあった(第1図). メリーラン

1) 産総研 地球科学情報研究部門
2) 産総研 特別顧問

キーワード: ハットン シンポジウム, 花崗岩研究, 国際学会



第2図 メリーランド大会の日本人参加者7人で大会中に会合をもち、日本招致について話し合った。

ド大会には日本人7人が参加していたので、その7人で話し合い、帰国後実現に向けて国内の花崗岩研究者に協力を求め、賛同が得られたら立候補することにした。このとき日本から参加していた杵掛俊夫氏(愛知大)が、その会合の際に、日本に招致するなら会場の提供ほか大学や地元からの支援が期待できることから豊橋の愛知大学で開催することを提案され、一同大いに勇気づけられた。

ハットン シンポジウムでは、大会中に開かれるビジネスミーティングで次回大会の開催地を決めることになっており、この大会のビジネスミーティングではまず、第4回大会のフランス開催がすんなり決まった。次に第5回大会についての開催地立候補募集があったが、日本は正式の立候補宣言まではせず、皆さんのご要望があれば次回大会までに可能性を検討しておく、と表明するにとどめた。かわりにアルゼンチンとフィンランドが立候補宣言の意志表明をしたが、中でもアルゼンチンは他の南米諸国と協力体制をとって連合軍でやる、と意欲を見せ、ブラジル代表もそれに同調した。最終的には日本も候補地の一つとされた。

3. 日本招致へ

メリーランド大会の後、出席者を中心として、日本開催が可能かの検討が始まった。多くの研究者から日本開催賛成の意見が寄せられたが、大学関係者からは地質調査所が実行計画や準備作業の中心になることが条件、という声が非常に多く、地質調査所関係者としては不安でもあった。しかし、地



第3図 ハットン シンポジウムの国内向けホームページの表紙ページ。

質学会の夜間小集会などで花崗岩研究者に集ってもらい、石原舜三を中心に準備委員会が発足して本格的に実行計画が議論されるようになった。開催地は、杵掛氏の提案による豊橋が全員の賛成を得た。一方、川野良信氏(佐賀大)の尽力により、国内の花崗岩研究者間の情報交換や意見交換のためのメーリングリスト(Gr-NET)が作られ、100人を超える研究者や学生がメンバーになった。また川野氏はハットン シンポジウムを紹介するホームページ(第3図)を作り、この国際会議の普及につとめた。地質調査所では大陸地殻セミナーが毎月開かれ、花崗岩や関連分野の最前線の研究が紹介されるようになった。みんな手弁当の、いわば勝手連的な活動だった。

実行計画策定のための会合は毎年学会のたびに開かれ、第4回フランス大会の前年くらいには、セッション構成や巡検コースについての素案に近いものまでできた。この頃、組織委員会からの情報ではアルゼンチンやフィンランドから準備状況の報告は何もなく、準備をしている気配がないとのことであった。フランス大会の年になり、やっと大会のビジネスミーティングで提案できる見通しになったので、メリーランドのブラウン教授やフィル・キャンデラ教授、フランス大会の組織委員長であるベルナル・パルベラン教授に立候補の素案を送った。



第4図 カルロス・ラペラ教授(手前)とボブ・パンカースト博士。

4. 国際メーリングリスト上の対決

世界の花崗岩研究者たちは、1990年代中ごろから国際的なメーリングリスト(Gr-RES)を作って、絶えず先端的な問題を議論しあったり情報交換をしたりしていた。世界中の主だった花崗岩研究者はほとんどメンバーになっているようで、ネット上で日常たたかわされている議論をフォローするだけでも大変勉強になる。日本国内で始めたGr-NETも、この国際花崗岩メーリングリストをお手本にしたものである。

1999年夏、フランス大会を約3週間後に控えて発表準備に忙しい頃、このGr-RESに発表された一文を見て仰天した。フランス大会で立候補宣言したアルゼンチン、ラプラタ大学のカルロス・ラペラ教授と長年その共同研究者であるイギリス南極研究所のボブ・パンカースト博士の名前で、2003年の第5回大会をアルゼンチンのある有名なリゾートで開催したい、という大会招致の提案書であった。なかなか魅力的に書かれており、ウーンこれも悪くないか、と思ったりしていたら、私たちの旧友でIAVCEI花崗岩部会の会長でもあるメリーランドのキャンデラ教授から個人メールが届いた。君たちの日本案を今すぐにGr-RESネットに流せ、早いほどいい、というものだった。そうか!と目がさめて、フランス大会で提案する予定の文章をもとに、大急ぎで日本案の紹介文を作り、「南米案は大変魅力的で私たちもそちらに参加したいくらいだが、私たちも数年かけてかなり具体的な実行案を作っているの、皆さんに一度見ていただきたいと思ひ・・・」という導

FIFTH HUTTON SYMPOSIUM

Granites and related rocks in island arcs and continental margins

JULY, 2003

THE JAPANESE PROPOSAL

1. Date : July 24 (Thr) - 28(Mon), 2003

Since the coming Hutton Symposium will be held for the first time in island arc setting, we propose to have it soon after the International Union of Geodesy and Geophysics (IUGG) meeting in Sapporo (early-middle July, 2003), although the Hutton Symposium will be organized independently of IUGG.

2. Location : Toyohashi City, central Japan.

Conference hall of the Aichi University, Toyohashi. Toyohashi city is a middle-sized city close to the Cretaceous Ryoke granites in the center of Japan, and 100 minutes by bus from the Nagoya International Airport. It is easily accessed from Tokyo and Osaka with the Superexpress bullet train (Shinkansen). Holiday Inn Crown Plaza is located close to the university and many hotels are available in Toyohashi city.

3. Schedule :

July 19 (Sat) - 23 (Wed)	Pre-conference field trips
July 24 (Thr) - 25 (Fri)	Scientific Sessions
July 26 (Sat)	Mid-conference field trips
July 27 (Sun) - 28 (Mon)	Scientific Sessions
(business meeting on July 28 afternoon)	
July 29 (Tue) - August 2 (Sat)	Post-conference field trip to Korea

4. Scientific sessions :

- Subduction related magmatism
- Granitoid typology and their geneses
- Magma chamber processes
- Migmatites and melt generation
- Growth of continental crust
- Mechanism of emplacement
- Granites in various tectonic settings
- Metallogeny



5. Registration fee: US \$200

第5図 フランス大会で立候補の際に使用したした日本案のOHP画面。

入文をつけて Gr-RES ネットに載せた。書いてみたら確かに実行計画案の具体性・完成度からみると私たちの案の方がはっきり上で、これでこちらが引込む手はないな、と思った。

5. フランス大会で日本開催決定

第4回大会は1999年、フランス中央部の古都クレルモン＝フェランで、35ヵ国から230人の参加者を集めて開催された。当然ヨーロッパ各国からの参加者が多かったが、南米からの参加者が30人あり、南米とヨーロッパとの近さを実感した。日本からも過去最高の12人が参加した。大会参加者の多くは、Gr-RESネット上でのアルゼンチンと日本の先行提案を見て知っており、会期中ロビーではしばしばそのことが話題になった。

組織委員長のバルベラン教授は大会4日目の午後、両国チームの代表を集めて調整をはかった。第2回オーストラリア大会の際、やはり次回開催地

にメリーランドとフランスが立候補し、本会議の前に関係者間の談合で次回はメリーランドとし、フランスは次次回開催に名乗りをあげる、という形になったので、今回もできれば当事者同士で調整できれば、と考えたのである。しかし今回はどちらの国も8年後は不可能で、談合は決裂し、そのままビジネスミーティングに持ち込まれた。両チームが計画案を演壇で紹介し、会場全体の議論になった。オーストラリアとアメリカは日本支持が、ヨーロッパは南米支持が多いようにみえた。結局会場の議論では結論が出ず、翌朝セッション開始前に参加者全員に一票投票してもらって決めることになった。

その日の夜はシンポジウムディナーだったので、日本人は非社会的で自国の仲間たちとしか話をしていないという巷の先入観を取り除くよう、つとめて社交的にふるまった。ラペラ教授をはじめ南米の代表者グループは、前からの知人も含めて気持ちのよい好人物ぞろいで、一緒にサッカーの話で盛り上がった。中学高校時代からのかくれサッカーフリークであることが意外なところで役にたった。

大会中に親しくなったフランス西北部のレンヌ大学の江 博明(Jahn Bor-ming)教授は、私たちに対してアジアで開催することの意義を強調し、応援すると言った。実際、彼自身と中国人ポスドクの3人がその晩レンヌへ出発しなければならぬので不在者投票を認めるようバルベラン教授に強く求め、返事をしづるバルベラン教授に「日本に3票!」と言い残して帰って行った。

翌朝、シンポジウム会場入口のデスクには、急ごしらえの投票箱が置かれ、係員が名簿で名前をチェックしながら、ハサミで切っただけの投票用紙を渡していた。私が用紙を受け取った時、隣でなんとバルベラン教授が自分で用紙を3枚切って、神妙な顔つきで JAPON, JAPON, と書き込んでいた。江 博明さんたちの分だ! この3票が大きな意味をもつとは、この時は予想していなかった。

集計は昼休みに、両国チーム代表の立ち会いのもとに行なわれた。結果は82票対79票の3票差で日本。意外なほどの僅差で、この大会に日本人参加者が12人いたことが決定的だった。ラペラ、パンカーストの両氏が笑顔で私たちに「おめでとう」と握手を求めて来た。結果は午後のセッションの開始時にアナウンスされ、会場は拍手に包まれた。



第6図 フランス大会で、日本開催決定を受けて演壇でお礼のスピーチをする石原代表。左はフランス大会の組織委員長 バルベラン教授。

6. 組織委員会とロゴマーク

大会が終わって帰国した私たちは早速、国内の研究者たちに日本開催決定を報告した。次回のホスト国になると決まったことで、ハットン組織委員会を引き継ぐことになり、それまでの準備委員会をもとに、石原舜三を委員長、中島 隆を事務局長とする組織委員会(第1表)がスタートした。早速、科学プログラム小委員会の有馬眞教授(横浜国大)を中心に、シンポジウムのセッション構成案作りが始まった。

ハットン シンポジウム日本大会は、初めて島弧で開かれる大会であり、またハットン開催地としては初めて中生代末期以降の花崗岩地域ということになる。フランス大会での議論でも、そうした新しい花崗岩に対する関心が強かったことを考え、新しい時代の島弧火成作用に焦点をあてたセッションを作ることが方針として立てられた。

第1表 第5回ハットン シンポジウム組織委員会。

組織委員長	石原舜三(産総研特別顧問)
事務局長	中島 隆 (産総研 地質調査総合センター)
プログラム委員会委員長	有馬 眞(横浜国大)
同 委員	広井美邦(千葉大)
同 委員	高橋正樹(日大)
同 委員	今井 亮(九大)
会場担当委員	沓掛俊夫(愛知大)
巡検担当委員	志村俊昭(新潟大)
情報担当委員	川野良信(佐賀大)



第7図 第5回ハットン シンポジウムのロゴマーク。

日本開催が決まったので、大会のロゴマークを作ろうということになり、川野氏(佐賀大)の発案で図柄をGr-NET上で一般公募した。集まった数点の案のうち最も人気の高かった、花崗岩のモード三角図を石垣に見立ててその上にお城をあしらった図柄(第7図)が採用され、それ以後制作されたサーキュラーやホームページの表紙、本大会会場に参加者に配られたバッグなどあらゆるところに使われた。次点となった図柄は、ハットン シンポジウムの便せんのレターヘッドに生かされた。

7. 開催期間は7月? 9月?

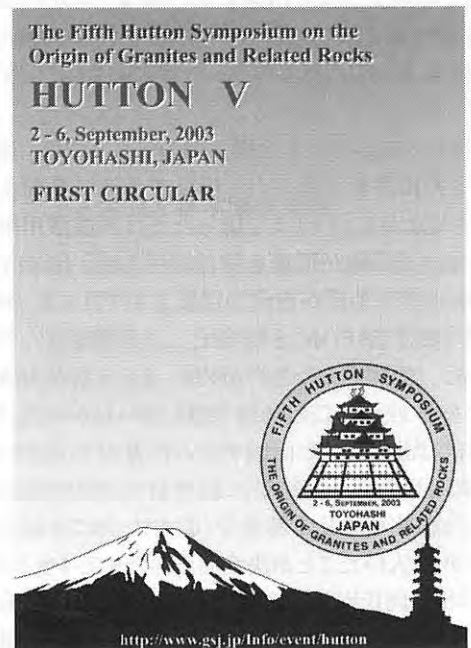
第5回ハットン シンポジウムは、最初は7月下旬を開催期間と予定していた。2003年は日本国内でハットンの他に2つの大きな国際学会が予定されていた。1つは札幌で7月初旬に開かれる国際地球物理学連合の学術大会(IUGG)、1つは地球化学の国際学会で9月前半に倉敷で開催されるゴールドシュミット・コンファレンスで、いずれもハットンとは比べものにならない大きな学会である。特にIUGGはいくつかの国際学会がその中で行なわれるという大きな規模の大会で、その中の1つが国際火山学/地球内部化学会(IAVCEI)である。このIAVCEIの中に1990年頃花崗岩研究の部会ができ、ハットン シンポジウムはこの花崗岩部会と密接につながりをもった。従って、今回のハットン シンポジウムもIAVCEIの一部としてIUGGの期間内に札幌で行なうという選択もあり得たが、私たちは彼らとは全く

別に、計画通り豊橋で開催することを選んだ。

当初の7月下旬案は、豊橋の会場の使用可能期間から出て来たもので、巡検をはさんでIUGGの開催期間とほぼつながるようにして、外国人参加者が両方の学会に続けて出られるように、と考えた案であった。ところがその後、IUGGの開催時期が1週間ほど早くなったため、間があいてしまって出て出にくくなった。同時に外国の大学教官たちの都合のつきやすい時期を再調査し、シンポジウム開催時期を9月のゴールドシュミット・コンファレンス直前の9月2~6日に移動した。その結果、実際にも外国人参加者の20%、日本人参加者の15%が、ハットン大会終了後続けてゴールドシュミット・コンファレンスに参加した。

8. ファーストサーキュラーとホームページ

2003年日本大会の概要を紹介するファーストサーキュラーは、大会の2年前の秋ごろに4ページ程度のリーフレットを製作し、国内外の主要機関に郵送した。同時に第5回ハットン シンポジウムのホームページを開設して、サーキュラーの内容をそっくり掲載した。これらの表紙絵には、できたてのロゴマークが使われた(第8図)。作成にあたっては、大ま



第8図 ファーストサーキュラーの表紙。

かなセッション構成と計画されている巡検コースの紹介がその主な内容になるので、それらを決めなくてはならない。セッションは4つの大きなテーマ分野に、巡検は、コース案の中から適当と思われる6件にまとめ、参加を予定している人に希望のセッションと参加したい巡検コースを問うアンケートを付けて、回答した人にセカンドサーキュラーを送ると明記した。

第5回ハットン シンポジウムのウェブサイトは、地質調査所のホームページの中にアドレスを作って開設し、2001年11月、ファーストサーキュラーをアップロードすると同時にGr-RES ネットで世界中にアナウンスした。同時に第5回ハットン シンポジウム事務局のメールアドレスを新設し、アンケート回答を受けられるようにした。これは大会や巡検参加者の概数をつかむだけでなく、本番の登録受付もメールで受けられるようにするためのシステム試運転の意味もあった。

9. 参加登録受付はすべて事務局で

ファーストサーキュラーへの回答は4ヵ月後に締め切ったが、国別で日本の次に多いのがロシア、次が中国であった。ヨーロッパやアメリカの、毎回常連になっている欧米の有力研究者からの返事が少ないのが気になったが、彼らはセカンドサーキュラーもネットで見るともりだから出さないのだろうと思うことにした。巡検は6コースとも15-30人の希望が集まり、この段階で取り止めになるコースはなかった。その中で、希望者数は韓国コースが最も多かった。

セカンドサーキュラーは大会の10ないし12ヵ月前に発行し、参加登録申込用紙をつけることにした。すなわち発行と同時に参加申込受付開始となるので、その前に参加費用払込の方法とそれの受け取りおよび管理のシステムを決めなくてはならない。また、ロシア・中国などから参加者渡航のために主催者からの証明書類の発行依頼が多数来ることが予想され、かなりの手間仕事になる。さらに、外国人参加者のためのホテルの斡旋、参加申込者へのその後の連絡や質問対応。これらを旅行会社などに全部丸投げすると費用がかかりすぎる。きめ細かい対応をするためにも理想的には事務局内で全

部やるに越したことはないが、ハットン事務局にはアルバイトさんがいないので、戦力的にはいささか苦しい。所内の研究者と一緒に事務局をやってくれる人を探したが、本人はOKでも上司や所属ユニットから了解が得られないなどの事情で結局協力が得られず、石原・中島の2人で事務局業務のすべてをやることになった。

登録受付を全部事務局でやろうとしても、どうしてもわれわれ2人ではできないことがあった。最近ではクレジットカードでの払込が多く、カードからの引き落としはどこかに依頼しなければならないのである。結局、このカード払いの入金管理とホテルの予約受付だけを大手旅行会社に依頼し、ほかは全部事務局が直接対応することにした。すなわち、参加登録申込はすべて事務局が受け、カード払いとホテル予約申込の人の分だけ旅行会社にコピーを送る、という方式である。組織委員会のメンバーたちは「なるべく外注して負担を減らした方が」と気を使ってくれたが、1992年京都IGC(万国地質学会議)の際に外注先が申込書を抱え込むだけで思うように動いてくれなくてさんざんな目にあった経験から、外注部分はなるべく少なくした。

会場となる愛知大学は「全国一新幹線の駅に近い大学」だそうで、JR豊橋駅前から私鉄で6分、3つめの駅が「大学前」といい、愛知大学正門まで10メートルの所に停車する(第9図)。この交通至便さのおかげで、参加者の宿泊は豊橋駅近くのホテルを確保すれば問題ない。しかし旅行会社が紹介するホテルはだいたい高額なので、豊橋駅近くのホテルを全部調べあげ、適当な価格の所に差し替えさせた。旅行会社は「うちはそんな所とは契約し



第9図 私鉄駅「大学前」と愛知大学正門。

てませんよ」としぶったが、「じゃあ今回契約してください」と押し切った。「おたくみたいな所は初めてです」と言われた。

10. 参加申込受付開始

セカンドサーキュラーには参加申込用紙をつけ、氏名・所属・連絡先と講演タイトル、希望セッション、参加希望する巡検コース、さらにホテルの予約を希望する人は宿泊期間とホテル名、合計払込金額と支払方法を書いてもらい、講演要旨と一緒に送ってもらう形にした。講演要旨は、受取り後短期間で要旨集を編集・出版することを考えて、Word98のファイル指定で、メール添付で送ってもらうことにした。

セッションは、ファーストサーキュラーで示した4つの大テーマの中にそれぞれ複数のセッションを立てて、全部で10セッションとなった(本号、有馬ほか参照)。そのそれぞれに国内外合わせて2-3人のコンビナーを、プログラム小委員会が選出し、依頼した。日本人のセッションコンビナーと組織委員会のメンバー、巡検案内者を合わせると、30人を超えた。第5回ハットンシンポジウムは文字通り、日本の花崗岩研究者陣が総力を挙げて実施した大会であった。

セカンドサーキュラーも、送付用の冊子とウェブの両方で発表した。印刷物としては16ページのものになり、2002年12月に完成して、ファーストサーキュラーに対して参加希望の返事をくれた人たちに郵送した。ウェブの方はそれより少し遅れて2003年1月にhtml文の原稿が出来上り、ハットンのウェブサイトに、ファーストサーキュラーを差し替える形でアップロードした。参加申込受付の締切は4月末とした。いよいよ申込受付開始である。

11. 思いがけないSARSの風

参加申込の出足は最初鈍かった。ファーストサーキュラーへの参加希望の返事数が最も多かったロシアからは、ただ講演要旨だけを送りつけて来る人が相次ぎ、参加申込用紙はなし、あるいはあっても払込送金の欄は空欄であった。招待や資金援助を期待していることは読み取れたが、今回の大会

では万博協会からの資金援助が受けられなかったこともあって、大会として途上国からの参加援助はできなかった。ロシアからの希望者は、モスクワやサンクトペテルブルグからはごく少数で、ウラジオストク、ハバロフスクなど極東ロシアや中西部のエカテリンブルグなどからが大部分を占めていたが、ほとんど皆参加できなかった。最終的にロシアからの参加は、イルクーツクとマガダンからの2名だった。

一方、昨今の中国では国内研究費を海外の学会への出席旅費に振り替えられると聞いていたので、多数の参加が予想されたが、同様の講演要旨だけのメールが多数届いた。ちょうどこの時東アジアで新型流行性肺炎(SARS)が猛威をふるっており、中国は多数の犠牲者を出したにもかかわらず、国内感染状況の把握に失敗があったこともあって、政府が一時海外渡航手を停止していた。この措置は6月にはいって解除されたが、そのあたりの不透明さのために、当事者は具体的な手続をとらず、出国許可のための招待状と外貨枠取得のための招待状、明細書などを作成・送付したのは徒労に終わった。結局、中国からの参加者は11人にとどまった。

ロシア、中国など共産圏諸国やアラブ諸国からの参加者については、ビザ取得のために日本側で本人の身元証明や来日中の行動日程など最大4種類の書類を外務省に提出しなければならない。国際学会の際はこの仕事が主催者側の大きな負担になるが、今回は北大教授時代に経験のある石原がすべて対応した。そのため、通常外注方式だと必ずおこる本人との連絡に関するトラブルがほとんどなくてすんだ。

12. 25カ国から200人以上の参加申込

申し込みは、この種の大会の常として締め切りまでは比較的少なく、締めぎり直前に集中、特に最後の3日間に全体の約5割が殺到した。最終的に前回のフランス大会に次ぐ200人以上の参加者となった。日本国内からの参加はそのうち約半分、105人を数えた。この数は当初の予想を大幅に上回るもので、花崗岩研究者だけでなく、関連分野から多数の参加があったことによる。大会を盛りたてようと協力してくださった皆さんに、主催者としては心

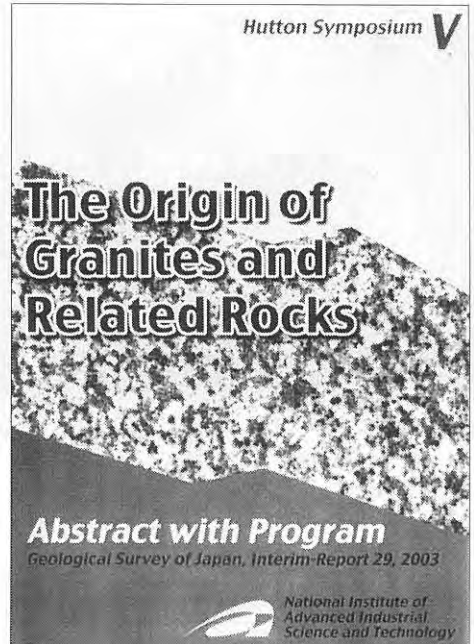
から感謝している。

最終的に、外国からの参加者は、オーストラリアが最も多く17人、次いでアメリカが15人、以下韓国13人、中国11人、インドは日本からの参加になる人も含めて9人、カナダとドイツが各6人、フランスと台湾各5人、イギリス4人、イラン3人、フィンランド、ポルトガル、トルコ、ロシア、ブラジル、南アフリカから2人ずつ、香港、スロヴァキア、オーストリア、アルゼンチン、モンゴルから1人という内訳であった。初めてアジアで開かれた大会であることを反映して、アジアからの参加者が過去最多の数になり、ヨーロッパからの参加者はこれまでの大会に比べて少なかった。南米からはさらに少なく、日本と開催地で競争相手だったアルゼンチンのカルロス・ラペラ氏も来られなかった。アルゼンチンはこの数年深刻な経済危機に見舞われており、2年前に彼とオーストラリア国立大学の年代測定ラボで会った時も、日本には行けないかも知れないと言っていた。今思うと、もしこの大会がアルゼンチンで開催されることに決まっていたら、実際に開かれたかどうかかわからない。

日本から参加した105人の中には日本に留学中の外国人および日本の大学教官になっている外国人が合わせて10人以上含まれていることも特筆すべきことであろう。インド、韓国などおなじみのアジアの国の他、コンゴ、コロンビアなど本国からの参加者がいない国の人もいて、国際色はますます多彩になった。

13. 口頭発表とポスター発表

本大会では200人を超える参加者のうち180人から発表申し込みがあり、そのうち約半数が口頭発表希望であった。今回は原則として申し込まれた講演要旨の内容によって口頭発表を選ぶことにプログラム委員会で決めていたが、この選抜は悩ましい問題であった。中国やインド、イランなどでは、口頭発表が公費参加の条件になっていて、そのために早い時期に口頭発表の招待状を請求してくるケースがかなりあったが、嘘は書けなかった。プログラム作成にあたっては、なるべく多くの人が話せるように発表時間を1人15分とし、朝8:40から夕方6:00までフルに使って正味4日間で62コマを確保



第10図 講演要旨集の表紙、巡検案内書(本号石原ほか, p.26)とペアのデザインになっている。

した。前回、前々回大会の約2倍の数である。それでも拾いきれなかったいい話がいくつかあり、今でも心残りである。

惜しくも選にもれて残念ながらポスターにまわってもらった人からのクレームも何件かあった。ポスターより口頭発表の方がステイタスが上という感覚が国際的にも根強いことと、特に今回は口頭発表者が成果論文集(Proceedings Volume)に投稿できることになっているので、ポスターだとその権利が得られない、という理由もあったようである。

講演要旨集は科学プログラム委員会で編集され、巡検案内書と共に地質調査総合センターの速報として出版することになった。これは、これまでのハットン シンポジウムではだいたいその国の地質調査所の出版物として作られていることから、事務局が地質調査総合センターに強く要望して認められた。表紙デザインは、同センター情報室の河村幸男氏が腕をふるってくれた(第10図)。これらは大会参加者に会場で1部ずつ渡され、かつ内外の主要研究機関に送付された。また国立国会図書館にも所蔵されている。



第11図 第5回ハットン シンポジウムの会場となった愛知大学記念会館。

14. パワーポイントは大丈夫？

ここ数年の間に、学会発表には、パソコンでパワーポイントなどの発表用ソフトを用いて作成した画面を液晶プロジェクターを使って映写する方式が主流になってきた。4年前の前回大会では大部分がOHPまたはスライドプロジェクター使用であったが、今大会では、口頭発表希望者に講演要旨と共に希望を書いてもらったところ、大部分がこの方式を希望だった。

現在多くの学会でこの方式を受け入れているが、発表の現場で作動不良が起こってプログラムの進行に支障をきたす例が頻発しており、そのような事態のために同じ画像をOHPでも用意してくるよう主催者があらかじめ参加者に求めているケースも多い。実際、この年の5月に開かれた国内の地球惑星関連学会合同大会で、この種のトラブルが何件も起こっているのを会場で目にして、不安になった。人に相談すると、パソコンに弱い人ほど根拠もなく楽観的で、パソコンに強い人ほど真剣に心配してあれこれ助言してくれた。

今大会の会場になる愛知大学記念会館では、学内の情報処理センターから技術的な応援が得られるという話だったが、その映写設備や応援内容がはっきりわからなかったので、状況確認と打ち合わせのため豊橋に赴いた。前年9月に年代測定の国際学会を主催した際にこの問題を担当された、名古屋大学年代測定センターの加藤丈典助教授にお願いして名古屋から出向いていただき、技術的な

指導を仰いだ。会場となる記念会館の会議室には備え付けの液晶プロジェクターがあり、情報処理センターの技術者はウィンドウズなら対応できるが、マックは経験がないので主催者側で対応してほしいとのことだった。

加藤氏は、画像を作ったシステムやソフトの違いで画面に異常が出る実例を持参のファイルで見せてくださり、事前にファイルの様式を統一化すること、ウィンドウズとマック2台(OS9とOSX)の3台のパソコンを用意して切り替えて使うことを勧められた。様式の統一化のため、発表者にはバージョン指定のパワーポイントでファイルを作って、前もってディスクで郵送してもらうことにこの時は決めたが、その後発表前に完成ディスクを持参してもらうことに方針変更した。パワーポイント方式は、直前まで発表図を書き直せる点が大きなメリットなので、早い時期に要求しても送って来なかったり、送ってきても来日後直前差し替えを頼まれることが予想されたからである。

15. 巡検は全部で9コース

ハットン シンポジウムは、毎回違った場所でその花崗岩を見ることを趣旨としているので、巡検のもつ意味は大きい。特に、今回は活動的な鳥弧という場での初めての大会であり、主催者側としても巡検には力を入れ、かなり早い時期から計画を練り上げた。

しかし本登録を受け付け始めると、巡検参加の申し込み数は、特に中心となるプレ巡検、ポスト巡



第12図 1日巡検(M1-三河領家)の露頭でのスナップ。中央説明しているのは案内者の沓掛俊夫氏。

検が、ファーストサーキュラーでの予備調査の結果を大きく下回った。中でも韓国コースは申込件数が意外なほど少なく、そのため韓国側案内者団は実施を断念した。特に欧米からの申込がほとんどなく、これにもSARSの影響があったという声を聞いた。他のコースは7-16人の参加者で、予定通り実施した。プレ巡検4コース、ポスト巡検1コース、会期中の日帰り巡検4コースの計9コースとなったが、これはこれまでのハットン シンポジウムで最多である。プレ巡検は各コースとも、最終日は夕方6時から豊橋市内で開かれるアイスブレイカー・ビアパーティに間に合う時間に豊橋に到着するよう計画された。日帰り巡検は大盛況で、貸切バスの定員を超えて満員札止めのコースも出た。これらの中身は別稿と口絵で詳しく紹介されている(石原ほか、本号)。

16. 大会中は移動事務局

約一年半前にファーストサーキュラーを発表してから本大会まで、参加者の登録受付から旅行社との連絡、参加者との必要書類のやりとりや外部からの問い合わせ対応、印刷物作成、組織委員会内の打ち合わせなどはすべて産総研地質調査総合センター内の石原と中島のデスクが事務局として機能してきた。しかしここで1つ問題が生じた。大会期間中は2人とも豊橋に移動してしまうので、事務局デスクが留守になってしまう。さらに2人ともプレ巡検の案内者にもなっているので、その期間も合わせて事務局機能をどのような形で継続させるかを考えねばならない。結局ノート型パソコンを巡検先まで持参し、宿の電話から産総研のサーバーへアクセスして事務局へのメールを見ることにし、また事務局の電話番号になっている研究所内限定使用のPHS・携帯電話を、その出張期間だけオープン使用にしてもらった。豊橋のホテルには前もってプリンターを送っておき、会期中に届く参加者あてのメールの印刷や、発表用OHPの直前追加作成にも対応できるようにした。7月に行なわれた巡検予行演習の際に、ノート型パソコンを持参して、滞在予定のホテルで接続と作動のチェックを行なった。こうして巡検期間中は移動事務局、会期中は豊橋サテライト事務局として活動することになった。



第13図 会場ロビーの受付デスクとそこで活躍した沓掛麻由子さん(右)。

17. サードサーキュラー

参加者が確定したところで、最終となるサードサーキュラーを作り参加者に送付した。ここで初めて口頭発表のプログラムを発表した。実際には、口頭発表を希望したのにポスターにまわってもらわなくてはならない人にはそのことのお詫びを、セッションで座長をやってもらう人にはそのお願いを、希望したセッション以外で発表してもらうことになる人にはその説明を、ポスター発表者にはパネルボードのサイズを、と相手によって幾通りもの内容になる、資料つきのお手紙のようなものであった。そういう内容なので、このサードサーキュラーは、印刷物は作らず、すべてメールで事務局から各参加者に個別送信した。200人以上の人に送信するには約1週間かかった。これはかなりの仕事で、さすがに疲れた。

18. いよいよ大会開幕-世界の一線級が続々と

大会準備の最後の仕上げは、会場で参加者に配布する物の用意と発送。特に早い時期から手配を始めたロゴマーク入りのシンポジウムバッグはなかなか良質品で、これに講演要旨集と巡検案内書、プレゼントの絵はがき「日本の花崗岩」などを入れたもの215人分、さらに手作りのネームプレート、ぎりぎりまで粘って最終バージョンを入れた参加者名簿と口頭・ポスター両方の発表プログラム一覧、そして段ボール25箱を、アイスブレイカー・ビアパーティの会場になる豊橋のホテルに送り出し、プレ巡検に出発した。



第14図 アイスブレイカー会場風景。

プレ巡検が終わり、巡検参加者を引率して豊橋に到着すると、ホテルではもうアイスブレイカー会場で配布物デスクの準備が始まっていた。チェックインする間もなく、準備作業に合流する。デスクの対応は大会会場責任者である沓掛氏のご家族が総出できばきとこなしてくださった。ちなみに沓掛氏の夫人はかつて岡山の妙見岩体を研究なさった旧姓白川頼子さん、3人のお嬢さんのご長女麻由子さんは現在英文科の大学院生で、外国人対応にも不安がない。彼女たちは大会期間中、会場の受付デスクを担当して下さる一方、参加者の同伴家族のための見学ツアーにも案内者として活躍してくださった。

今回のシンポジウムは初日の朝からすぐにセッションが始まるので、到着チェックとこれら配布物の受け取りは、なるべく開会前夜のアイスブレイカー会場ですませるよう参加者に呼びかけておいたのが効いたのか、アイスブレイカーの出席者は全参加者の半数を大きく上回り、広めの会場のあちこちで再会の歓声とにぎやかな談笑の声がはずんだ。プレ巡検も皆事故もなく無事終了し、それらに参加した人たちはそれぞれのコースのおもしろかったことを上機嫌で話し合っているようだった。アイスブレイカーが終わると、高名な外国人参加者が、この近くで値段の高くない日本料理店はないかと聞きにきた。現在いろんな国際学会や国際誌で活躍している世界の第一線の研究者たちが、この大会のために集まったのだという実感がやっとわいてきた。

19. 鬼門パワーポイントと若手研究者の会の活躍

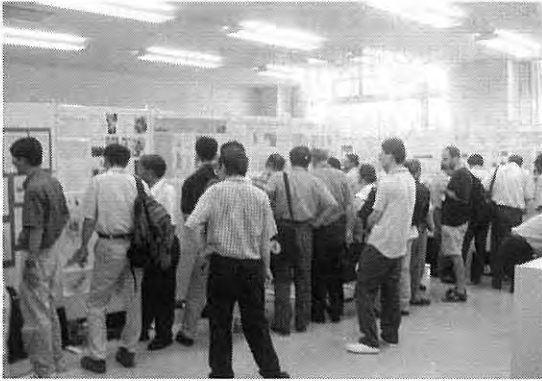
一夜明けていよいよ大会初日。パワーポイント対



第15図 シンポジウムの講演風景。講演者はS. ハーレイ氏(イギリス)。後のパワーポイント操作席は花崗岩若手研究者の会の斎藤 哲氏。

応は結局、講演前にファイルを液晶プロジェクターに直結のパソコンにインストールする方式にしたが、会場は最初のセッティングができておらず、朝のセッション開始前の限られた時間でパソコンの確保から設定までを大あわてでやる羽目になった。それを救ったのが谷 健一郎氏(海洋科学技術センター)と斎藤 哲氏(横浜国大大学院)の両若手研究者で、彼らは自分のパソコンを会議中提供するのみならず、機械の設定と発表者のファイルの一部変換からインストールまでをこの限られた時間内にやってのけ、無事開会にこぎつけた。結局初日は彼らが一泊パワーポイントの操作係をつとめてくれ、何とか救われた。

発表用ファイルのインストールと作動テストは、毎日コーヒープレイクや昼食の時間、さらには夕方セッションの終了後の短い時間に集中して行なうことになっていたため、この担当者は休憩なしの激務になる。かつパソコンの経験と知識を必要とするので、誰でもつとまるわけではない。2日目以降は、彼らを中心とする日本の花崗岩若手研究者の会のメンバーたちが、半日交代でこの役をつとめてくれた。おかげで大会の最後までパワーポイントは一度のトラブルもなかった。2、3年前から全国の大学・研究機関の大学院生やポスドクたちによって作られ、自主的な研究交流を続けてきたこの若手研究者の会が、思いがけない形で世界にその存在と力を示すことになった。日本のこれからを背負う若手研究者たちが世界の第一線の研究と身近に接する機会を持ってくれるようにとの目的で日本開催を実



第16図 ポスター会場風景。

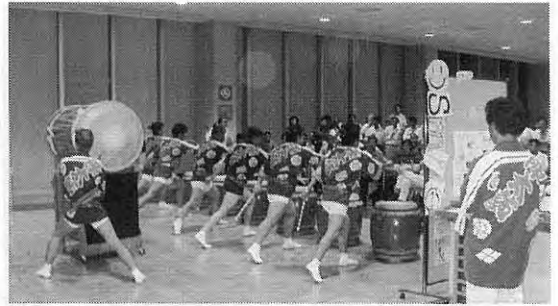
現させ、国内の花崗岩研究者が総力をあげて支えた今回のシンポジウムであったが、本番では彼ら若手研究者の力にも助けられる結果となった。

余談になるが、谷氏らはプレ巡検中に意気投合した外国人研究者と、会期中に掲示板で呼びかけて、外国の若手研究者との交流会を開いた。十数ヵ国から30人を超える参加者が集まったそうで、日本の若手も多数参加し、大変楽しく有意義な会だったそうである。その話を聞き、この大会をやってよかったと思った。

20. 歓迎パーティとシンポジウムディナー

本大会の初日の夕方、セッション終了後に愛知大学の厚生センター内のレストランを貸し切って、大学主催の歓迎夕食会が開かれた。参加者は全員招待され、和食も洋食もそろったビュッフェ式の立食パーティはカジュアルな雰囲気、参加者はリラックスして楽しんでいた。前半には豊橋市長(代読)や愛知大学学長の歓迎のあいさつがあり、後半には地元につながる和太鼓の合奏が披露され(第17図)、外国人参加者たちは大喜びであった。さらに最後には大学のグラウンドで、これも地元の伝統文化である手筒花火が実演された。これは火薬をつめた砲身を人が抱えて打ち上げる、豪壮この上ないので、日本人でも初めて見る人が多かった。

シンポジウムディナーは組織委員会の主催で、4日目の夕方にアイスブレイカーと同じ豊橋駅上のホテルで開かれた。このディナーでは、石原組織委員長からこれまでの花崗岩研究の歴史とそれをふまえたこの日本大会の意義についてスピーチがあっ



第17図 大学主催の歓迎夕食会で披露された和太鼓。

た後、これまでハットン シンポジウムに大きな貢献のあったB. チャペル氏(第2回大会委員長)、M. ブラウン氏(第3回大会委員長)、B. パルベラン氏(第4回大会委員長)、E. スティーブンス氏(エディンバラ王立協会委員)の4氏に、本大会のロゴマークをあしらった武節花崗岩製の文鎖が記念品として贈呈され、それぞれしゃれたお礼のスピーチで会場を沸かせた。最後は会場のあちこちで記念撮影の輪ができ、閉会時間を大幅に過ぎても歓談は尽きず、ホテル側から再三幹事役の私たちに会場をあけるよう催促されるほどだった。

21. 次回大会は南アフリカ

ハットン シンポジウム組織委員会の最後の大きな仕事は、次回の大会の開催地を決めることである。次回第6回大会については、米国ラスベガス大学のR. メトカーフ氏が3年ほど前に、シェラネヴァダ花崗岩地帯を主な巡検フィールドとして立候補したいとの意志を非公式に伝えてきていた。しかしその後今大会直前まで、具体的な案が出てこなかったので、サードサーキュラーで改めて、彼を含めた全参加者に立候補を募った。それが効いたのか、メトカーフ氏は大会直前に組織委員会に具体的な実行計画案を送ってきた。私たちは彼に、本大会には参加者のためにA4用紙1-2枚の要約資料を作ってくるように指示した。

シンポジウムが始まって間もなく、会場1階の受付デスク前の資料テーブルにメトカーフ氏の提案資料がならんだ。ところがそれから少しして、南アフリカのL. アメリオ氏からも招致提案書が発表され、同じ資料テーブルに出された。さらにインドのS. シン氏からも立候補が表明され、次回大会の開



第18図 シンポジウムディナーで挨拶するチャペル氏(左)とホワイト氏。

催地は私たちの予想を大きく超えて一気に混戦模様となった。

メトカーフ氏の提案は、C. ミラー氏、C. パーンズ氏ら有名研究者を共同提案者として挙げ、シエラネヴァダ東麓の有名な保養地レイク・タホを開催地とすることや、巡検コースなど具体的な計画が提示されており、一歩先んじているかに思われた。しかし、ヒマラヤの花崗岩とインド盾状地の両方が案内できる時期に開催するというシン氏や、南アフリカからボツワナまで興味深いフィールドが目白押しだと力説するアメリオ氏の猛追は急で、予断を許さない状況となった。結局今回も、最終日のビジネスミーティングで各陣営の立候補宣言と計画内容紹介の後、参加者による投票となった。結果は、南アフリカ、アメリカ、インドの順で、上位2案の票数が比較的接近していたため、南アフリカ案とアメリカ案の間で決戦投票が行われ、再度南アフリカが選ばれた。石原組織委員長が「決定しました。第6回ハットン シンポジウムは南アフリカで開催されます」と宣言すると、メトカーフ氏が真っ先に笑顔で拍手し、会場の皆も続いて拍手でそれに応えた。

22. おわりに

第5回ハットン シンポジウム組織委員会は、大会の閉会と共にその任を終え、次期の委員会に役目を引き継ぐ。この大会で発表された研究の代表的なものは、現在成果論文集として出版されるべく原稿が提出され、査読が行なわれている。4年ごとに

作られるこの論文集は、その時の花崗岩研究のあらゆる面での最前線の議論を知ることができるものとして、多くの人に読まれている。今回の論文集には、日本人研究者の投稿がこれまでの大会より多く、数編の論文が掲載されると思われる。今回、これまで必ずしも国際的によく知られていなかった日本の花崗岩とその関連分野の研究を世界に紹介することは日本開催の大きな意義であったが、同時に今回の大会に参加した日本の若手研究者たちに、シンポジウムでの発表やそれに対する議論、そしてこの論文集を通して、日本の、そして自分たちの研究が世界とどのような位置関係にあるのか、どういう意味づけでつながっているのか(あるいはいないのか)を、それぞれに感じてもらうことも重要な目的であった。その目的が達成されたかどうかは、これから数年の日本の花崗岩研究がその答を出してくれるだろう。

最後に、第5回ハットン シンポジウムの開催に際しては、多くの団体、個人からさまざまな形でご支援ご協力をいただいた。中でも愛知大学、東京地学協会、豊橋市、大幸財団、井上財団、岩谷財団から財政的援助をいただいた。産総研地質調査総合センターからは、講演要旨集と巡検案内書の出版その他多くの支援を受けた。日本地質学会、岩鋳学会、火山学会、地球化学会、独立行政法人産業技術総合研究所からは後援をいただき、広報等でご協力をいただいた。会期中同伴家族のために企画されたレディースプログラムの実施には、杏掛教授ご一家ならびに豊橋コンベンション協会の鈴木恵子さんらボランティアグループの皆さんのお世話になった。地質調査総合センター地質調査情報部の河村幸男氏には、ホームページ作成に際して指導していただき、また講演要旨集と巡検案内書の表紙デザインをしていただいた。地質調査総合センターからの参加者の皆さんには、亀井淳志氏に参加者のネームプレート作成に助力をいただいたのを始め、多くの方々さまにさまざまな形で応援していただいた。これらの方々および諸団体に心からお礼を申し上げます。

NAKAJIMA Takashi and ISHIHARA Shunso (2004) : The Fifth Hutton Symposium: (3) Planning, organizing and performing.

<受付：2003年12月16日>